

質疑・総合討論

○中川 5人のコメンテーターとそれに対する著者、朴さんの応答という形で進めました書評会が一応終わりました。

これから質問をとりたいと思いますが、この『引揚げ文学論序説』の一番根本的なところにある問題は、事実と呼ぶ形で措定されているものが、どのように意味を発生してしまうかということに、尽きると思います。もちろん、これは『帝国の慰安婦』の問題に通底しているわけですが、それでも、「引揚げ」という体験そのものについて、それを相対化したり、個々の体験というものに回収したりすることは、もちろん当たり前のことですが、それを私たちが「今」という地点からどのように解釈し、あるいはそれを分析することが可能なのか、あるいは可能でないのか、つまり、当事者性ですね。それを個々の全く個人的な問題としてそれぞれ見ればいいのか、あるいはこの問題をこうした場にさらすことによって、何が公的な問題点として浮上するのかを考えるべきなのか。あるいは、それは、もしかしたらアカデミックの代理表象の傲慢さではないかと考えるのか、とかいろいろな問題が背景に出てくるかと思います。

少しだけコメントをさせていただきたいんですが、私、この正月、台湾に行っていました。ちょうど今、台湾で大変な観客数を得たドキュメンタリー映画がございまして、これを私は見るのができなかったんですが、日本でも岩波ホールで上演された『湾生回家』という映画です。つまり、台湾で生まれた日本人が、70年代や80年代に台湾を再び訪問する話です。これが、それを、台湾の人々は、非常に好意的に見ていきます。もちろん、ここに出てくる人たちは、台湾で生まれながらも、敗戦後に引揚げる。引揚げた後、ずっと台湾への郷愁を持ち続けている。ところが、その一部の人が、やはり郷愁のみではなくて、違和感というものを傷のように抱えるという問題が出てくるわけですね。このことを、被植民者側であった人々がどのように受け取るかということがあらわになったものです。ちょうど私が行っているときには、そのプロデューサーである陳宣儒^{チェン・シュエンルー}が、おばあさんが日本人であると言ったのが嘘だったというニュースが毎日マスコミで取り上げられていました。陳氏は田中實加という日本名を名乗っていますが、私はおもしろい現象だと思うんですね。全く台湾生まれの台湾人が、「湾生」という人々を追っていくことによって、何か日本人、自分は日本人じゃないかしらと思い込む。そういうふうな思考が及んでしまうというようなことも、非常におもしろく感じました。ここで、やはり引揚げ問題を語るとき、植民地で生まれた宗主国の人々の物語というものが、「郷愁」という問題といつもつながっています。あるいは、そのときの非常に豊かないい生活を懐かしむという形もございまして、それが文学の中にあらわれているときには、鼻につくこともあるわけですね。それには、もしかしたら私は植民地肯定論者なんだという意識が働いているのか、これを作品としてちゃんと見るができないのか、分析できないのかというような、自己への、揺り返しというものが働いているのかも知れません。

そういう中で『少女たちの植民地』という、関東州で育った藤森節子さんの書かれた本を想い出します。この方は、中国文学者です。藤森さんは生まれてから12歳まで関東州で過ごされました。私は、やっぱりこの本は少し取っかかりになるかと思っています。つまり、彼女は郷

愁を持ちながら、戦後ずっとその郷愁をいかに断ち切るかを考え続けておられます。しかも、この方は知識人でもあるわけです。この人が常にそういう傷にかかわりながらも、でもやっぱり懐かしく、幼児の時代を思い、自分の今の日本の中での身に沿わなさを嘆ずるというようなものが、決して嫌みでなく書けています。こういう叙述というもの、こういう作品というものも出てきていることにも留意すべきだと、思いました。

そういうところから、決して単純な問題ではなくて、非常に多層的にこの引揚げ文学という朴さんが見出したジャンルにこめられた多様な問題を考えていければと思います。そういうところから、質疑応答に向かいたいと思います。差し支えなければ、挙手していただきまして、ご所属とお名前を言っていただければ幸いです。

○浅野 早稲田大学の浅野と申します。

朴先生、ありがとうございました。手法について、文学というのは、私はやっぱり人間の精神の中軸をつくり上げている何者かを探求する学問だと思っていて、非常に大事なものだと思っています。人工衛星から写真を幾ら拡大で写しても、やはり地上に生きている人間たちのその感情までは撮影できないわけで、私も法制度みたいなものから帝国の歴史を考えてきましたけれども、朴先生の人間一人一人の人生に則した帝国の中での複雑さというものを拾い上げていく手法は、非常に学ぶところが大きいと思っています。その上で、ナショナル・アイデンティティーの誕生とか起源というものを問題にしたいというふうに朴先生おっしゃって、そのために、定住者を中心とするナショナル・アイデンティティーの中では、余り焦点が当たらないような素材に切り込んで、そういった人たちのその人生というものをあえて取り上げることで、それがつまり帝国の重層性というものが忘れ去られていったのに対して、それを取り上げて、その帝国の重層性が単純化されてナショナル・アイデンティティーをつくり上げる材料として浅はかな形で利用されている。それで、ナショナル・アイデンティティー自体が、今、激しくぶっかっている。そういう時代の中で、そのナショナル・アイデンティティーをうまく組みかえて和解させるために、今、我々がもう失ってしまいかけているようなものを拾い上げるという、そういう手法だと思うんですけれども、そのナショナル・アイデンティティーを、だからどういうふうに組みかえようとしているのか、またそれに当たって必要なその素材としてどういうものを選ばれようとしているのか。もちろん、大体のところは我々も感じてわかるんですけれども、あえて言葉で言うていただくわけにはいかないかなというふうにちょっと思うんですけれども、いかがでしょうか。

ナショナル・アイデンティティーをどういうふうに組みかえようとしているのか、その方向性と組みかえるための材料としてどういうものを拾い上げようと、少なくとも自分が意識されているのか。それをあえて言葉にさせていただくわけにはいかないでしょうか。

○朴 さっきちょっと言い忘れましたけれども、ナショナル・アイデンティティー自体を破壊すべきだとかというふうには思っていない。例えば民族でもいいんですけれども、その民族の名前で差別された歴史がある以上、やっぱりそうした事実を除外して考えるわけにはいきません。ナショナル・アイデンティティーを規定事実として考えるのは当然のことと考えます。さっきの原さんのような質問は、そうした「基本」にこだわってのものでしょうか。それには、一定の意味があると思います。と同時に、ナショナル・アイデンティティーの認識が構築されたもので

あるということも念頭に置く必要がある。それは、弱者の問題を考える根拠となる枠組みを超えて、暴力や権力になる瞬間だと思います。つまり、固定するのではなく、考える道具にしつつ、必要なとき相対化もする。そうした距離のとり方が必要だと思います。

例えば、近代はナショナル・アイデンティティーが構築してきた時代と言っても過言ではなく、その結果として、誰でもできるだけその中心にいたい、純血でありたいと願うような時代を私たちは生きてきました。いわば、人々の結束のためにナショナル・アイデンティティー教育をしてきた国家の方針と、そこに寄り添っていく個人の欲望が一致した時代だったわけです。しかし、今では、そうした傾向が変わりつつあるように思われます。以前のように「純血」にこだわる時代でもなく、むしろ混血が格好いいものと見られるような視線も生まれています。

在日も、韓国は十数年前までは、韓国語がしゃべれないというので差別していました。しかしそうした視線がここ10年ほどでかなり変わったわけです。逆に、孤児となって海外へ里子として出されていた人たちでも、今では大切に扱われるようになりました。もちろん、それはあくまでも、海外で活躍してくれている場合に限られますし、混血が格好いいというような視線を持つには至ってないのですが。

つまり、実際に格好いいかどうかの問題ではなく、純血でないと見られた、つまり純血思想に亀裂を入れるような存在が排除されてきたという事実を知ることは、もはやそのような態度を取る必要がないということを教えてくれると同時に、いわゆる「ディアスポラ」がある瞬間特権化されるようなことがある、ということにも気づかせてくれます。つまり、様々な支配と抑圧が「ディアスポラ」を作り出した歴史を知ることも当然ながら大切ですし、それこそがポストコロニアリズムの成果でもあります。弱者と弱者言説は区別されるべきと思うのです。

例えば、韓国ではさきほど話した意識変化の結果、ここ10年、在日が「発見」され、大切にされてきました。しかし同時にその在日の言うことであれば何でも正しいとされるような、それを批判することが禁忌になるような妙な構図が生まれています。

ですから、そういった両側面を見ながら、両方からの戦略というか、距離のとり方を取る必要があるのではないかと。場合によって相手によってはことなる態度を取れるような「移動しつつ考える姿勢」が今の時代に必要な戦略になりうるのではないかと思います。

○浅野 ナショナリズムをうまく利用して、ネーションとネーションとを和解させるような何者かを発掘しようとされているのではと私には見えるんですけども。

○朴 さあ。ナショナリズムを利用して、というふうに明確に認識していたわけではありません。でもいわれてみるとそう思われても仕方のないことを書いているのかもしれないですね。確かに「日本人」には「日本」のことを考えてほしかったし、韓国人には「韓国」のことを考えてもらいたかったのですから。私は、「和解」という言葉を、昔、本で使ったところ批判者たちによってその意味を曲解されるようになったので、しばらくのあいだその言葉をあまり使わないようにしていました。しかし、曲解する人たちがいる以上、むしろもっと積極的に言ってもいいと思うようにもなりました。つまり、非難のあり方に応じて、言葉や概念や込める意味を変えていく必要があるように思っています。ある意味での開き直りも必要だと思います。和解を水に流すのと同一視するような乱暴な議論に対して、それがどうして間違っているのかを、言わねばならないと。

○西 ジャ、ちょっと当事者として一つ。浅野さんの質問に対して僕なりの考えを話させていただいた後で、ちょっと朴さんへの質問にも変えていきたいと思うんですけれども。

文学研究が持っている一つの可能性というのは、文学作品というのは翻訳可能なんです。朴さんも、夏目漱石や大江健三郎を翻訳されて、それを日の丸つきで読めと言っているわけではなくて、韓国人にそれを世界文学の一つとして読んでくださいというふうに手渡しているわけですね。つまり、文学を通して、つまりナショナル・アイデンティティーは越境できるという信頼の上で文学というのは世界中に流通しているので、やはり、朴さんがこの『引揚げ文学論序説』の中で取り上げられたような作品は、とりあえずは日本語で出されていますから、日本人が受けとめなければいけないんだけど、ここで取り上げられているようなテキスト群は、韓国人にも共有されることが将来的には期待されるものだというふうに思っています。朴さんのお仕事というのは、やっぱり『帝国の慰安婦』もそうだけれども、日本人に向かっては一つの毅然とした態度を示し、また韓国人に向かって同じく別の水準で毅然とした態度を示して、その二面性を持っている力だと僕は思っています。

ですから、これは質問として朴さんに聞きたいのは、この本が将来的に韓国語でも出て、そのときに韓国人向けにはどんな解説をお書きになるつもりがあるのかというのを、ちょっと聞かせていただきたいです。

○朴 そうですね。もしかしたら、この本の後書きに書いたことより心のこもったものが書けるかもしれません。

というのも、(それぞれの学問だからこそやれることがあるとは思いますが)文学の力を、あえて「文学の力」と言いたいのですが、学生たちに読ませてみると改めて気づかされるのです。例えば、この本にも引用した五木寛之さんの体験や、村松武司の植民者論である『朝鮮植民者』という本を読ませますと、いわゆる「文学」テキストでないながら、体験が細かく書かれていることによって、つまり、これまでの単純化から抜け出したテキストであるので、日常や思考のディテールがわかるわけですが、それまでの日本観や自己理解が間違っているということをすぐにわかってもらえます。たとえば原爆博物館を見ても、彼・彼女らは悲惨に感じるだけでそれ以上考えようとしません。むしろ被害者然としていると考える。しかし、切々と訴えかける「言葉」に出会うと心を開いて受け止める。読んでよかったと言ってくれるのです。もちろんみんながみんな、そういうものを書けるわけではありません。そういう意味では引揚げ文学だからといって必ずしも肯定的な理解を生み出す訳でもなく、そこはやはり、いい文学になっていないといけないのでしょう。いずれにしても、加害と被害の輻輳、知られることのなかった植民地の日常、引揚げ者の日本戦後を考えることの意味、などに焦点を絞ることになるでしょうね。そうしたことを考えることによって他者に対する理解を深めてもらう。「文学の力」を伝えられる文を書きたいものです。

○中川 それでは、ほかに。

○蘭 ジャあ、上智の蘭ですけれども。

中川さんのコメントと、原さんの最後の指摘は響き合っていると思うんですよね。それで、朴さんは、最初、原さんのコメントに対して、つまり、引揚げ文学と、それと要するに在日文学との関連を比べてみたときに、原さんは、どう言ったらいいんでしょうかね。引揚げ文学と

比較して、在日文学のほうがかはるかに重いんじゃないかというふうな言い方をしたと僕は理解しました。それに対して、その読み込みというのと、それと中川さんの言ったような形で、その何というかな、ある種、この、例えば藤森節子さんが関東州へのそのノスタルジーというのを非常に上手に処理しているということと、それと、台湾の中における、私、あの『湾生回家』は見ました。見て、最後にちょっと残念だなというような感じで帰ってきましたけれども。それは、やっぱりノスタルジーが前面に出てくる。ある種の何か商業主義も感じられるというふうな形でもって、本人たちは、やっぱりそれ、いいんだろうと思うんですけども、それと、ある種のやっぱり、日本に対するアピールですよ、台湾社会の。それをすごくやっぱり感じ取って、ポリティカルだというふうに思いました。

そう感じるのは、中川さんがおっしゃるように、私もそういうふうな見方で見てしまっているのかなというふうなことも感じます。それはそれで置いておいて、原さんが言った論点に関して、一番最初に朴さんは、これが最後の、きょうの主題ですねというようなことを言われて、でも、朴さんはきちんと答えられなかった。朴さんは原さんが言ったことに関して、もっときちんと話を返してもらいたい。私も、きょうは原さんの話を聞いて、さすがだなと思いながら、非常に、私だったらどう答えるだろうかというようなことをずっと思って、で、朴さんどう答えるだろうかと思ってずっと期待していた。ちょっと。質問が多かったので忘れてしまったと思いますので、もう一遍思い出してください。

○朴 原さん、お読みになったのは金石範さんからの引用だったのでしょうか。ですよね。何て言ったらいいんだろう。私、金石範先生と個人的にも長くおつき合ひさせていただいてますし、尊敬する方でもあるのですが、やはり、家父長的言葉とも思ってます。もちろん、金先生は一定部分植民地被害の当事者でありますので、そのような言葉自体を批判するつもりはありません。むしろ、重く受けとめているつもりです。ただ、そうだからといって、在日とは別の、異なる体験をしている人たちを差異をつけて受けとめるべきとは思っていません。

原さんがおっしゃったのは、在日の体験のほうが、引揚者の体験より重い、ということでした。でも、果たして本当にそうなのか。つまり、どっちがより重い、というふうに、人が経験する差別や暴力や苦しみは、総量を計って比較するべきものなのか。そうした質問が必要と思うのです。金先生の言葉自体は尊重していますが、「被害」が絶対化された瞬間、つまり他者の痛みより自己の痛みを優先する瞬間、「言葉」の力は死ぬと考えています。しかし、ポストコロニアリズムという正しい問題提起は、あるところからそうした権力化に気づかなくなった。あるいは無頓着になった。その結果、今ではそうした絶対化された被害者言説が主流になってしまっていると思うのです。さっき言い残したことがあるのです。こし戻りたいのですが、戦後思想でこういう非主流になった人たちがいたと、さっき中山さんもおっしゃった。そのとおりだと思いますし、そういう方たちがもっと主流として言ってくればよかったなとわたしも思います。

しかし、同時に、私が問題提起したかったのは、そういう思想家や知識人がいなかったということではなく、主流になれなかったというのはちょっと残念だ、反戦思想ほどに国民の中に定着しなかったのは残念だ、ということなんですね。その違いははっきりしていると思うのです。いろんなところでいろんな人が、支配とは何かとか、植民地主義は何なのかなど考えてきまし

たし、そうした営みの延長で日本の、中山さんもおっしゃるように日本だけが、ポストコロ思想も成立している。言われてみると、本当にそうだと思います。大きな、大切なことを教えていただいた気がしました。そうしたことはやはりもっと評価すべきだと思います。同時に、そのために、その結果として一種のゆがみも出ていて、私自身まさにそうしたゆがみのために苦しめられているという実感を持っています。この本には余り書かなかったのですが。最後に、刑事裁判のことを1行だけ書いたのも、そういう思いもあつてのことでした。

○蘭 苦しみに、大きい苦しみと軽い苦しみがあるのかということでしょうか。

○朴 そうです、そのことを言いたいのです。ですから、実際に苦しみの総量に差異があるとしても、異なっているとしても、自分の苦しみのほうが大きい、というふうに言わなくていいのではないかと思います。もちろん誰もがそういうふうに思うべきとは言いません。人の体験や思いや苦しみはもちろん耳を傾けられるべきであるのですが、自分が苦しいならむしろ別の苦しみに耳を傾けることができるはずなのに、実際にはそうしたことに無頓着な傾向があります。これを言えばあれが軽んじられる、というふうに考えがちです。しかし、本当にそうでしょうか。

別の人の苦しみも見ようとする者に対して、こっちは見てないのか、といった抗議は、姑息な甘えとも考えます。つまり、こっちを見ることは、あっちを見ないことになるわけではないのに、そのように考えてしまう、だけのことなのです。そしてその背景には何かを守ろうとする心理があります。最初にちょっと話したのですが、決定的な、絶対的な弱者って果たしているのかという問題でもあります。実際は権力関係が相手によって変わるように、加害・被害関係は相手によって変わる。わかりやすく言えば、いわゆる「在日」の苦しみを強調する人が、家では家庭内暴力を働いたりする。女性に対しては強者になりうるのです。このことを10年ほど前に「李恢成論」で書いたところ、在日知識人に批判されるようになりました。

ナショナル・アイデンティティー認識を何とか変えたいとしたのは、実はそういう問題意識があつてのことで、いろんなアイデンティティーを持っていることを自覚して、性や階級や民族アイデンティティーなどいろいろなものを同時に持っているのに、民族アイデンティティーだけが特別視・絶対化されてきた歳月の中における抑圧を顧みたいわけです。

○中山 (京都大学の)中山です。発表者でまた発言するのも申し訳ないのですがけれども、私は、やっぱりその最後の原さんの問いかけというのに対しては、何かせつかく朴先生たちがこまでつくってくれたものを、どうしてもう一回もとに戻すんだろうと思います。私は、おとし夏にソウルで発表して、樺太の戦後についてお話ししたときに、韓国人の青年から、「日本人の引揚者について悲劇のように語り、被害者のように語るが、彼らは祖国に帰れたからいいじゃないか、朝鮮人は帰れなかったんだからひどいじゃないか、悲劇じゃないか」と言われたんですね。それは、多分、韓国人からするとそうかもしれない。でも、このまさにこの(配布資料の)6ページに載っている金先生が書いていたその申京煥さん、日本政府からしたら、「確実に韓国人だ。韓国に強制送還するのに何が不幸なんだ」ってことですよ。だから、比較の問題として見ていくということ自体が余りにもこう我々がとらわれて過ぎてきて、朴さんとかの世代が格闘してくれてきたものを、なぜもう一回我々がそれを戻って、やっぱり在日のほうが大変じゃないか、日本人はまだましじゃないかという話をしなければいけないのか。戦後の国際秩序再

編というのは、やっぱりこの同時期に、日本人も、朝鮮人も、ロシア人も、ポーランド人も、中国人もみんなが突然移動させられてしまう。サハリンでは朝鮮人たちも、それはそれで日本帝国から解放されるかもしれないけれども、ソ連に対して拒否感が強かったりするわけですよね。やっぱり、その日常が破壊されるということを、東アジアでは1945年8月以降に全人民がやはり経験したことだと思うんですね。例えば、ソ連軍の軍人たちだって、日本人からすれば加害者ですが、こんな極東まで来たくなんかないんです。そういうことを受けとめていくためには、比較論はやっぱりもうだめだと思うんですよ。もしかしたら、原さんはそんなことを思っていないかもしれないけれど、あえて朴さんに問いかけたかもしれませんが、どっちが重たいという話じゃなくて、みんなで受けとめなきゃいけないって、僕はちょっと思った次第です。すみません。

○中川 はい。原さんどうぞ。

○西 その前にちょっと挟ませていただいていいですか。すみません。何か、何というか、メディエーターのつもりで話しますけれども、今、中山さんが強烈なことをおっしゃったのに対して、僕は、比較文学者なのでちょっと自己弁護させていただきますが、比較というのは、何といひかな、天秤にかけるという意味では決していないんですね。つまり、悲惨な経験というのは、日本人も悲惨だった、韓国人も悲惨だった、じゃ、チャラにしようって。それは、政治的、外交的なやり方ではあるかもしれませんが、学術的に比較するというのは、やはり日本人がこうむった悲劇を韓国人にもわかってもらえるようにする、で、韓国人がいまだに引き受けているような悲劇というものを日本人がきちんと理解するようになる、その両面の作業が多分必要で、僕は原君の指導にもずっとたずさわってきた人間なのでこうやってしゃしゃり出てきますけれども、多分、朴さんのプロジェクトというのは、やはりこの日本人でさえ疎かにしてきたようなこの引揚者文学というものを、まず日本人にきちんと見させる。そのときに、当然、朝鮮人の文学にも目を向けざるを得なくなっていくわけですね、日本人は。逆に、韓国人には、今、ようやく在日文学等のディアスポラのコリアン文学にも目を向け始めているけれども、かつて朝鮮半島に数十年もいたような日本人が何を体験していたのか、どういう記憶を持って日本に戻っていったのかということについては、ほとんどまだ知らない。それに対して、彼らの多少なりとも関心が広がっていくような土壌をつくらうとしているのが、多分朴さんで、つまり、原君にこの後答えてもらいたいんだけど、つまり、日本人や韓国人って、とりあえず言っておきますけれども、50年後どうなっているかわかりませんが、その共有するものとして小林勝や後藤明生のような日本人の引揚げ文学と、今度日本で苦しみ続けてきたような人々の経験を引き受けている金石範さんたちの、あるいは李恢成さんたちのような文学というものがどんなふうに関与されていくということをイメージしているのかというのを、原さんにはぜひ聞きたいなと思っています。

○朴 ちょっとつけ加えていいですか。

○中川 はい。

○朴 西さんの話を聞きながらちょっと思ったんですが、やっぱり、原さんだけでなく、みんな、私自身も含めてですが、私たちはまだまだ知らないことがたくさんある、という認識が必要かと思います。そう考えたとき、新たに突き出された事柄にひるんだりそれを拒否したり

せずに受け止められればと思うのです。ですから、在日の人と日本人がその悲劇の比べ合いをしたとしても、また別の被害者がありうることを念頭におくべきではないでしょうか。

もう一つは、さっきもちょっと話しましたが、絶対的な弱者はいないということなんです。それだけでなく、なぜそれを考えなきゃいけないかというと、絶対的な弱者がいるという考え方自体が、人に暴力を行使しながらそのことに鈍感にさせるからです。簡単な例を言えば、大岡昇平の有名な小説に、人を殺せる立場にいて、相手が私に気づかないでいるとき、一人の兵士は彼を殺すかどうか。それを決めさせる者は何か、といったことを考えさせるところがあります。そうしたとき、殺す人もいれば、殺さない人もいます。同じ日本人でも、アメリカ兵を民族の敵だと思って殺す人もいれば、誰かの息子の顔を見い出して殺さない人もいます。そうした違いを生むのは、ナショナル・アイデンティティーじゃない。その人の中にあるさまざまな性向、単純化して言えば、暴力性はそのナショナル・アイデンティティーという外皮をかぶって現れてくるわけです。つまり、必ずしも殺さなくてもよいときに人を殺させるのはナショナル・アイデンティティー（あるいはその正当性）ではない。にもかかわらず、ナショナル・アイデンティティーは他者を敵とみなさせて、殺すことを合理化してきた。つまり人間のなかにある暴力性を正当化する手段にもなってきたのです。だから、そうした暴力を働かせるものが果して何なのかを細密に見届ける必要がある。障害者は女性との関係でもっと弱者だし、まさにそのことによって時に強者になったりする。同性愛者を差別する民族主義者もいる。そういうことをもっと考えるべきで、そういう意味での思考の移動が必要と考えます。

○中川 はい。じゃ、原さん、どうぞ。

○原 はい。先生、皆さん、ありがとうございました。

今、いろんなお話をいただいたんですけども、自分の脳の処理速度がまったく追いついてなくて、お話しできないのが申しわけないんですが。

在日朝鮮人の文学の話をしたんですけども、正直、そういうふうを受け取られるんだという驚きがありました。中山先生がおっしゃったように、自分が、今までの先行研究の営みというのをあまりにも軽視して無知な状態でいたんだなということを教えていただいて、それだけでもありがたかったのですが、悲劇、苦しみの総量の比較、死者数の比較とかそういう話をしたつもりはまったくなかったんです。私は、小林勝を研究するなかで、小林勝という作家は、日本人が書いたテキストにそういう無頓着さがあるんじゃないか、自分自身も無頓着さがあるんじゃないかということに生涯を費やした、そういう作家だと考えるようになったので、一つ、在日朝鮮人文学と一緒に見ることによって、引揚げ文学のテキストの広がり可能性をとらえることができるだろうと、そういう問題提起をしたつもりだったんですが、ちょっと言葉が足らず、また理解が足らず、すみませんでした。

○中川 はい、どうもありがとうございます。

やはり、今の朴さんのお話もそうなんですけれども、全き被害者も、全き加害者もないんですね。そのときに、複層的に人間の心理の中に働く〈情動〉とか、そういうものの問題も、やっぱり文学の非常に主要な問題だと思います。

先ほどの西さんの比較文学擁護ですけども、私もそう思います。やはり、比較することは、総量を比較することではなくて、それによって全く自分と関係ないと思っている他者の発見と

いうか、他者への想像力を持つことですよね。だから、中山さんの方から、これから引揚げ文学というものは圧倒的に量が少なくなっていくだろうというご指摘があったんですけれども、そうかもしれません。しかし、一方において言えば、これからあの大量に流れ出たシリア難民が、シリアに帰るといえるときが来るわけですよね。つまり、同じような状況が世界中で動いて、そして、なおかつそれぞれの悲しみや心の傷の総量をもって我々に返してくる時がいずれ来るのではないのでしょうか。すごくバカな物の言い方をすると、そういう中で文学が生まれたときに、その文学を読解する力というものがどんどん失われていくような気がしますね。

先ほど朴さんおっしゃったとおり、引揚げ文学というものが、ただ「引揚げ」という体験を描くのではなくて、そこに渦巻いているさまざまな政治的、社会的、文化的なコンフリクトといますか、葛藤の所産としてあるのであれば、原さんのおっしゃるとおり、在日文学も、いや、そればかりではなくて、例えば、中山さんが挙げていらっしゃる問題系にもつき当たるのでしよう。

さて、ご質問はいかがでしょうか。

○中尾 恐れ入ります。岡山大学から参りました。でも、地元は高槻なので、京都、大阪のほうが近い中尾知代です。

ポストコロニアル・スタディーズで、ピーター・ヒュームのところで、ようやくこの間 Ph.D 論文を仕上げました。コーネル大学の酒井直樹先生のところにフルブライト・スカラーとして 10 カ月お世話になり、ブレット・ド・バリー先生ともお会いし、朴さんとブレット先生とのコミュニケーションのことも伺いました。質問コメントは二つに絞ります。1 つは、質問者である中山さんへの質問で、ほかの方も対象かもしれません。中山さんの概念の使い方はもう固定して動かないのでしょうか。つまり、「歴史は事実を探る、一方で文学は真実を個人的な側面からやる」というのは。それは側面の歴史と正史の関係とも似ていますよね。この用法が固定されるまでに何とかしなきゃと思うんです。私はイギリス文学関係から 30 年、それからアメリカにかかわって 15 年、オランダとは 20 年と（オーラルヒストリーや文学・映画表象の）研究調査をやってきたんですが、そうすると、やはり、クリスチャンベースでいう意味の「トゥルース (Truth)」の方が先に意味・価値として入ってきます。幼稚園がカトリック系だったこともあります。トゥルース (Truth) というのは、本当は、まさに歴史性とか個人性には関与しなくて、それだけで存在する「真実」あるいは「真理」ではないか。どの神ときめなくても、人間には把握できないであろうもの、それが大文字のトゥルースであるというふうに先に習ってきてしまったので、この、上野千鶴子さんたちが使い始めた“慰安婦”論の、事実・真実という言葉、リアリティーの使い分けに納得がいけないんです。今のところ、歴史学の若手に聞くと、歴史は事実 (fact) を扱い、文学は truth を扱うというので、私は非常に混乱する。歴史家によればによれば、歴史的に本当なのが「事実 fact」、個人的に本当だと思えるのは「真実 truth」だという、そういう使い方が固定化していると。だけど、そこにトゥルースを使っちゃうと、本当の個人の主観が持った何かがこぼれ落ちてしまう。そして、私たちには、把握、少なくとも個人、あるいは一つのネーション、ないしは 1 つの階級では把握できないものも、やっぱりこぼれ落ちてしまう。だから、もう一つ、別の言葉が必要な気がしています。今、確たるお答えはないと思うんですが、fact と truth の使用法をこんな風に固定させちゃってこれからも進むと心配なので、どうしよう

ということですね。

皆様の話をずっと聞いていて、他の国々にも引揚げ文学や体験はあるなと思っていました。中国から帰ってきたイギリス人や、オランダ領東インド、つまりインドネシアから帰らざるを得なかったオランダ人たちのことです。ヨーロッパの本国に引揚げ、帰ってみると態度も空気もつめたい、空もほとんど青くないといって、元の植民地の気候に近いオーストラリアやニュージーランドに、かなりのオランダ人や、一部のイギリス人が移住していきました。だから、まさにデラシネのネーションになる。そういう（日本と日本の植民地に限らない）植民地と本国の関係性の、ポストコロニアル的経験のことをずっと考えながら聞いていました。でも、そのあたりは明日の主題だそうなので、またその後のディスカッションを楽しみにしております。

○中山 あ、すみません。今回のこの「真実」、「事実」って話、それほど私は深い思想的背景があって言っているわけではなくて、朴さんの本を改めて読んだときに、いかにこう歴史研究と文学研究、実はこれを切っていいのかって大きな問題もあるわけですが、ディシプリンとしてお互い独自のディシプリンである以上は、それを突然取っ払って、何かこう総合スタイルにはできないと思うんですね。それ（ディシプリンを軽視すること）はもちろん墮落であると私は思っているのですが、じゃあ、歴史学と文学はどう対話するのか。「歴史学＝事実」みたいに言っていますが、別に歴史学にとって事実を明らかにすることは方法であって目的ではないわけですね。結局、マルクス主義的歴史観の言う、世界史の法則というのは、一種の、おそらく真実を超えた、むしろ真理のほうに入っていくわけですから、そういう意味では、何か事実、別に歴史学の最終目標が事実の確定なんだということを言いたいわけではないわけですし、何かこういう歴史学のすごい乱暴な、文学研究というのはもう事実を明らかにできるわけじゃないから意味がないんだみたいな議論はもうやめましょうという意味できちんと概念整理したほうがいいのかなって提起した問題なので、こういうことをもっと皆さんからいろんなお知恵を学ばせていただきたいなと思っています。その意味で、蘭先生が「現実」って書かれていましたけれども、あれはどういう意味を持たせておられるのかうかがいたいです。

○蘭 そうですね。本当にこの話は、話し出したら1時間ぐらいかかるような感じの話で、簡単にどういう言葉を見つけて答えたらいいかというくらい難しいですけども。要するに実証主義というものに対する批判というのが出てきて、それが日本の中では、慰安婦問題をめぐって、なかなかそれがにっちもさっちもいかない状況がある。しかし、私、慶応の日本史の大学院生と非常勤で話をしているんですけども、彼らは、やっぱり歴史学の中で、歴史学が実証主義だなんていう、そういう単純な時代はもう終わったということを明解に言ってます。ただし、だからと言って、じゃ、構築主義との付き合い方をどうするかということに関しては、非常に難しい。それはわかっている。それから、中尾さんも百も承知だろうと思いますけれども、例えば、「公人のオーラルヒストリー」というものをやっている人たちも、例えばオーラルヒストリーは、事実をしゃべっているわけじゃなくて、「羅生門」的だと理解しています。先ほど朴さんも言われましたように、同じ出来事に直面しても、それぞれが違ったような受け取りをします。いわゆる「羅生門」的な事実というようなことに関しては、実証主義者であろうと、歴史学者であろうと、社会学者であろうとそのことは共有しているわけですね。だから、現実で何が起きたかというふうなことをどう書きあらわしていくのかということに関する、それぞれのディ

シプリンにおけるアプローチや認識論は、それなりに今せめぎ合っているわけで、非常に難しい。少し前のようにいうことはできないことは、みんなわかっているんです。わかっているけれども、日本の場合には、繰り返して言いますけれども、慰安婦論争の中で、上野さんと吉見さんの関係、上野-吉見論争というのがあって、どうしても慰安婦論に関しては実証主義でいかざるを得ないような状況になってしまっているわけですね。実証主義的に見ていくことは違うとわかっているんだけど、それで議論している。

だから、朴さんが気をつけなくちゃいけないことの一つは、中山さんが言ったような形で、例えばある歴史学者が朴さんの批判で本を書いていますけれども、あれを見ると、完全に実証主義で書くわけですね。だけど、西さんも言っているように、朴さんの議論というのは、基本的には、その実証主義的だけでも、やっぱりこの引揚げ文学論の中でも、やっぱり歴史性というものが非常に前面に出てきて、それで、何というか、小説の中からやっぱり歴史性の中にまた還元しようとするような側面があるので、そこでそういうふうに見ようと思うと、ある歴史学者のような形で批判することは可能かもしれないと思います。

はい、以上です。

○中川 ありがとうございます。それでは、後藤明生さんの甥でいらっしゃる後藤さん、いらっしゃいますでしょうか。今日、お越しになっていると朴さんから伺いました。もし、何か本日のご感想のようなものがあれば、お願いしたいと思います。

○後藤 立教大学の後藤和彦と申します。

朴先生の『引揚げ文学論序説』を読ませていただいて、直後、先生と親しくメールをやりとりさせていただくことになりまして、その際、この会があるということをうかがって、東京から参りました。私、歴史や社会学のほうに関しては門外漢でありまして。

今までの皆さんのすばらしい議論をぶった切ってしまうかもしれませんが、僕が朴先生の「引揚げ文学論」に非常に関心を持って、読み始めると最後まで本を一度も置くことができないぐらいに興奮しながら読んで、即座に先生に失礼を顧みずにメールを差し上げたのは、僕の関心が戦後文学という問題にあったからなのです。私の専門はアメリカ南部文学なのですが、19世紀中葉の南北戦争に敗れたアメリカの南部には、戦後60年ぐらい（1920年代から30年代）にウィリアム・フォークナーという巨人を生み出して、それからフォークナーの陰に、中ぐらいに優れた作家たちを次々に生み出していくという「南部文芸復興」と専門的には呼ばれるプロセスがありました。そのフォークナーは、1951年にノーベル賞をとって、1955年、つまり戦後いまだ10年の日本にやってきて、若い日本の文学者たちを前にして、君たちのこれからの文学も戦後文学で、ばくもその一員である南部文学と一緒になんだというような驚くべき（南北戦争が終わって100年もたとうかというのに）発言をしたんですね。つまり、アメリカの南部の文学は、自分たちの文学が敗れた国の文学だというその戦後性をいつまでもずっとまとい続けているようなのです。それに対して日本の戦後文学については、いろんな意見がありますが、いわゆる戦後文学論争の中にいた批評家の一人からは、石原慎太郎の『太陽の季節』（1955年）、これが戦後文学の終わりなんだというような非常に性急な意見も出ましたし、もう一人の批評家は、村上龍の『限りなく透明に近いブルー』（1976年）、これで戦後文学の終わりというような言い方もありました。『限りなく透明に近いブルー』でも敗戦から40年、『太陽の

季節』に至っては10年もたっていないうちに戦後文学の終了宣言がなされるというね、この戦後をめぐる感覚の違いということを考えてきたということがあって、その違いを説明したくて、あるいは戦後文学とは一体何かという根本な問いに答えることがなかなか難しく思っていたところ、このたび朴先生の御本を通じて、引揚げ文学というテーマに何か虚を突かれるように、何かこういうふうと考えてみると日本の文学にとって戦後の問題が新たに見えてくるのではないかというそういうヒントをいただいたような次第なのです。

それで、そうですね、質問にならない、感想を言ってしまったような感じなんですけれども…… 朴先生は、引揚げ文学論という視点でもって150年を関する日本近代文学論を見直す新しい見方を持ち込まれようとしたんですけれども、戦争に負けた、あるいは日本の近代って、そもそもは幕末に西洋列強の力に屈服し敗北して、その敗北の反応あるいは反動として訪れて来たわけで、したがって日本近代文学はずっと敗北の文学だと言ってしまうことも不可能ではないと思うのです。その敗北と文学という側面に関して、何か突然で申しわけございませんけれども、何かご意見があれば伺えればと思います。急なご指名でこのように要領を得ない質問でまことに申し訳ありません。

○中川 朴さん、お願いします。

○朴 きょう、本をいただいたばかりですが、もうすこし時間をかけて答えられていたらと思います。

後藤さんは、後藤明生の甥に当たる方です。そのような方がいらっしゃるからではなく、原さんにもう一度言いたいのですが、基本的には原さんのスタンスでいいと思うんです。つまり、これまでのそういう議論が、暴力になることがある、ということに気づいてほしいというだけであって、そのスタンス自体を否定しているわけではありません。

きょうは抽象的な話ばかりしてしまいましたが、私の中には、やはり、3万人近いと言われている北朝鮮で亡くなられた方たちのことが、深く刻まれています。最近、また公には話題になったこともあまりなく、それはおそらく北朝鮮でも同じでしょう。しかしいつかは、必ず出てくる話と思うし、実際によくよく代表団が墓参りもできるようになりました。参りというか、調査のようなものだったらいいのですが、二、三年ぐらい前からそれができるようになった。それを北朝鮮の人たちがどう思っているのか知りませんが、いつかそうしたことが問題化されたときに、韓国の人たちはどのように向きあうべきなのか。ここにいらっしゃる蘭先生、浅野先生のほうがもっと詳しく中身はご存じだろうと思うのですが、そういう放置状態でよかったのかということを、どうしても考えてしまう。そういう立場から書いてみたわけです。

私たちはまだ知らないことがたくさんある、といったのもそういうことでした。同時に、じゃ、そういうことに向き合うときに、どのような「言葉」が私たちをよりよい方向というか、みんなが共有する空間を広げてくれるのか。納得とか心休まるとかって言葉はどうもしっくりきませんが、誰の言葉に私たちはより深く耳を傾けるべきなのかということなのです。

例えば小林勝的な贖罪の姿勢も大切と思いますが、やっぱり小林の「言葉」が果たして私たちを救う言葉になり得ているのか。実際あれだけ贖罪の言葉や気持ちを記してはいても、小林の作品の中で「現在」の在日の人々は小林の複雑な心境が投影された形で描かれます。小林の場合、子供のころに受けた心の傷なども、おそらく治癒できていない。そして、それは小林が

まじめすぎたからだと思うのです。それが、私の今のあの小林氏に関する考えですが、それに比べて後藤明生は、ある意味でいいかげんです。しかし、むしろそのほうが、浅野先生がきょうも触れられた和解という言葉で言えば、和解の可能性を生むと思うのです。

つまり文学として評価する立場と別の視点から評価するアスペクトは異なってくる場合があります。引揚げ文学を異なる民族間の和解を助ける可能性をはらんだ物語として読む時、後藤のような言葉がより役に立つと思うのです。ちょっと突き放しているような感じでさりと書いていますし、悲壮な感じでもない。まじめであれば悲壮な気持ちになるわけですが、同時に守る姿勢も作る。守ろうとするがために傷ついたりもする。そうした中、わたしたちは誰から知恵を得、しかるべき態度を学べるのか。今日はそうしたことをみなさんと考えてみたかったです。

蘭先生がおっしゃった、実証や歴史などにひきつけていえば、きっと、歴史学やこれまで引揚げそのものをやってこられた方からすれば、もの足らないところがたくさんあるかと思います。今後もいろいろ、教えていただければと思っています。

同時に、学問とは何かといった、学問の前提となる考えは何か、なぜ考えるのかということでは考えれば、重要なのはジャンルや分野ではなく、どのような素材や方法でも、何を生み出すのかとか、どこまで共有できるのかといったことが大切ではないかと考えます。

きょうは、すばらしい指摘やお話を、いろんな専門のことなる方々から伺うことができて、刺激的で幸せな一日でした。本当にありがとうございました。(拍手)

○中川 ありがとうございました。

○西 それでは、明日の予告も兼ねて。ひとこと言わせてください。

朴さんにほとんど締め言葉をもらったようなものなので、興ざめな蛇足にならないように気を付けようとは思いますが。

あしたは、日本に育たれた方々でありながら、ドイツやフランス、あるいはポーランドの現代史や文学を研究しているような方々から話題提供をいただいて、第2次世界大戦後、フランスの場合は敗戦国というわけではなかったわけですが、アルジェリアの独立戦争で結局敗れてアルジェリアを去らざるを得なかったフランス人というのがいて、つまり、そういうかつて支配者でありながら、そこを立ち去らざるを得なかった民族の文学を研究している方々に来ていただいて、その日本人の事例との比較ということをやりたいというふうに思っているわけです。それは、その敗戦の文学ということともかかわるんですが、今、僕はこのイベントの絡みもあって、この間は、白人が植民地時代に書いている文章、特に女性が書いた文章について考えていて、今もナディン・ゴードイマを読んだりしているのですが、原君の問題提起にあったように、日本人の引揚げ文学と韓国人／朝鮮人の未引揚げ文学なるものを比較するという、その非対称なものを比較するということの重要性というのは、その非対称性というのをどう見るかということだとも思いますけれど、その非対称性の1つに気づいたことがあります。つまり、日本人は、ほとんどの人は引揚げちゃったわけですね。遅れて引揚げた人としては、たとえばシベリア抑留の人などがいたかもしれないけれども、そういう人は金嬉老みたいなケースではない。旧外地に残った内地人というのはほとんどいないわけです。それは、やっぱり在日朝鮮人がこれだけ残っているのと比べたときに、極端な非対称性を示していると思います。

ところが、例えば、南アフリカのゴードイマみたいな白人の人たちはずっと残ったわけです。

アパートヘイトの解消後には、クツツエーみたいに故郷を棄てる作家まで出てくるのに、それでも、多くの白人がいまも残っています。非常に居心地の悪い思いをしながらも残っている。ところが、今日の話につなげると、それを、日本人は経験してないんです。それがとっても大きいことのような気がします。だから、これからやるべきことというのは、日本人が書けなかった言葉というのを、ほかの英語圏やフランス語圏やドイツ語圏の文学で補っていくしかないというふうに僕は思っていて、つまり、こういうマイナーな文学というのは、まず数が少ないわけですね。すると、量的にはメジャーな文学に勝てないんです。そういうときは、もうよその文学を借りてくるしかないんじゃないかというのが僕の方法論で、そういう意味でも、あした、今日の議論を深められたらというふうに思っていますので、月曜日という平日ですけれども、お越しいただける方にはぜひお願いしたいと思います。